

留学生授業の実践

— 授業での留学生とのディスカッションと言語学習 —

A Report on Discussion Classes with International Students

— Discussion with International Students in Class and Language Learning —

英語科 光田 怜太郎
地理歴史科 小太刀 知佐

<要 旨>

本稿は2016年度よりSGH-A（スーパーグローバルハイスクール・アソシエイト）校の実践として始まり、2017年度には平成29年度東京学芸大学「特別開発研究プロジェクト」として採択された留学生授業について、その狙いや授業の内容について報告である。また、生徒の反応や自己評価のデータに基づく分析を行い、自己評価と筆記試験には中程度の相関が見られた。

<キーワード> 異文化交流 SGH 留学生 スピーキング 4技能育成

0. 本稿について

本稿は、2016年度よりSGH-A（スーパーグローバルハイスクール・アソシエイト）校の実践として始まり、2017年度には平成29年度東京学芸大学「特別開発研究プロジェクト」として採択された、留学生授業についての中間報告である。（プロジェクトの名称は『高大連携による「話すこと」に着目した英語教育の実現～留学生による参加型授業の構築～』である。）第1章は小太刀知佐（地理歴史科）、第2章以降は光田怜太郎（英語科）が執筆した。

1. 本研究について

1.1 趣旨・概要

東京学芸大学に在籍する外国人留学生を、附属高校英語科の授業（英語表現/コミュニケーション英語）をはじめ、校内で行われる正規授業に招聘し、高校内のスタッフのみでは実現できない校内カリキュラムの「国際化」を目指す。

次期学習指導要領では、発表や討論・議論、交渉の場面を想定し、外国語による発信能力を高める科目群として「論理・表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」が設定されている。これまで、英語を通して簡単な会話や発表などはできても、議論や交渉を英語の授業内で行うというのは現状では目標として達成困難なのが実情である。これは従来、中・高等学校において、特に「話すこと」の言語活動が十分に行われていないことや、習った知識を活かしてコミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて適切に表

現する機会に乏しいことなどが背景として考えられる。「話すこと（発表）」は探究活動の成果を英語でプレゼンテーション力の育成などが期待され、部分的ではあるが本校で実施されている。しかし、「話すこと（やりとり）」の能力を伸ばすためには、実際にコミュニケーションを行う場が必要である。

そこで、英語科の正規授業において教室に留学生を8名程度定期的に招き入れ、高校生5名程度の小グループに配置し、ディスカッションを行う。これにより、英語を話さざるを得ない状況をつくり、英語を用いてコミュニケーションを取る。英語を母語としない留学生も多くいるが、彼らと英語で話すことで、母語が違っていても英語を通してコミュニケーションが取れることを体験する機会を創出することができる。

本校は入学時に帰国子女枠を設けており、外国での生活経験を持つ生徒が一定数いる他、タイ王国との交流に基づくタイ人留学生の受け入れなど、多様で国際的なバックグラウンドを持つ生徒が多く在籍している。また将来外国の大学への進学や、海外を舞台にした進路選択、外国語の習得などを目標とする生徒も多い。この分野を今後強化し、本校教員だけではフォローできない専門的な分野への大学教員の指導協力、また東京学芸大学に留学中の外国人留学生を講師・スタッフとして招聘し、英語などの正規授業や放課後のイベントに参加してもらうことで、これらの生徒に「校内にいながらグローバルな人材を目指す」という姿勢・機会を提供する。大学に留学し、本プログラムに協力してくれる留学生にとっても、

普段なかなか関わることのない日本の教育機関に参加することで、留学生活のより一層の充実や日本社会についてのより深い理解につながるはずである。

本プロジェクトの中心となる英語科の正規授業への留学生の定期的な参加により、定期的かつ大人数での日本語を母国語としないスタッフとの会話中心の授業の展開が可能となる。東京学芸大学の附属高校であるという本校の利点を生かし、高大連携の枠組みのなかでこれらを実施することで、他の大学附属学校でも実施可能なカリキュラムの構築を目指し、日本の高等学校における授業の新たなスタイルの確立に寄与したい。

1. 2 研究計画

(1) 留学生による参加型授業の実施

英語科の正規授業のなかで、1学期に数回のペースで少人数でのディスカッションなどの授業を実施する。本校ではネイティブの教員による授業が1年・3年のみで開講されており(2017年度カリキュラム)、この実施により3学年すべてで外国人を交えて「英語を学ぶ」のではなく「英語で学ぶ」授業実施を目指す。この授業は昨年度既に試験的に実施しており、今年度はその手法を、公開研等を通しさらに研究し発展させたい。ディスカッションテーマには、「自分の名前とルーツを説明する」「公共のマナー」(2016年度実施)といったその場で考え自身の考えを発信・共有するものから、他の英語科カリキュラムとも連動させて事前学習をし、ある程度知識を持った状態での意見交換が可能となるものまで展開することを目指す。

(2) パフォーマンス活動とその評価

新学習指導要領によれば、「論理・表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」ではディベート・ディッションといった語学活動が中心となり、得た情報や考えをどうアウトプットするか、総合型の語学活動が求められる。授業における生徒のパフォーマンスをどのように評価するか、(1)の授業実践に基づき評価の軸となるルーブリックモデルを作成し、それに基づく評価の出し方を検討する。このルーブリックを附属高校・大学紀要、あるいは附属高校公開授業研究会で発表する。

1. 3 大学及び附属学校の教育・カリキュラムへの応用可能性

<大学>

次期学習指導要領の改訂で重要視される高校での英語教育における「会話力」向上のカリキュラム作りに参画

し、教職課程の大学生にも授業への参加を促すことで、新たな教育モデルとその指導者育成の機会とする。さらにこの事業を留学生に対する正規授業へと拡大させ、附属学校でのTAや授業参加に応じて単位取得が可能となるカリキュラムをつくることで、東京学芸大学の留学生に新たな経験の場を提供し、日本の学校現場の国際化・外部発信の一助とする。

<附属学校>

対話中心のアクティブラーニングを重視した授業の実施を各学期の核に位置付け、他のカリキュラムとも関連づいた年間計画を構築する。英語でのアウトプット、情報共有という観点で他教科とも連携を図る。

2. 授業の流れについて

2.1 授業のねらい

ここからは授業の実際を記したい。

留学生授業は2016年度より始まり、2年次の英語表現Ⅱにおいて年間4回行った。また、2017年度は5回を予定している。

この授業の「英語科の授業」としての狙いは、4人程度の生徒のグループの中に留学生が1人入ることにより、生徒に英語を使わざるを得ない状況を作ることで、生徒の発話の機会を促すことである。(SGH-Aとして活動している本校として国際交流や異文化理解もこれに伴って促進されることが期待できる。)

日本人生徒だけで構成されたグループで英語の活動をさせても、よほど意識が高くなければ日本語を発してしまうものである。もちろん、教員が辛抱強く”Don't speak Japanese.”と言いつけることが必要であるが、この留学生授業は、そのような指導がなくても生徒が英語を使わなくてはならない、または自然と使いたくなる状況を生み出すことができることが、英語の指導の環境としてとても効果的なのである。

2.2 カリキュラムの中の位置づけ

本校では、「コミュニケーション英語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」はそれぞれ1年次から3年次にかけて3単位ずつ履修する。「英語表現Ⅰ」は1年次に2単位履修する。「英語表現Ⅱ」については4単位を2年次と3年次にそれぞれ2単位ずつ分割して履修する。

「英語表現Ⅰ」は本校では1年次に半年間、クラス20人ほどの2つのグループに分け、2人のALTがそれぞれ日本人の教員とチームティーチングの形式で会話の授業を行ってきた。半年間なので、8学級の本校では半

分の4クラスが前期、もう半分が後期にこの授業が行われる。しかし、この授業が終わると、在学中に外国人と関わる授業を受ける機会はなかった。

このたび導入された留学生授業では、2年次の「英語表現Ⅱ」において、10名程度の留学生が40名のクラスに入る。これは、1年次のALTの授業の流れを受けるものという位置づけになる。頻度は先述の通り、年4～5回である。

なお、この留学生授業の導入と時期を同じくして、3年次の「英語表現Ⅱ」においても、2週間に1回ほどALTが授業に入り、作文の指導をすることになったため、本校では全ての学年で外国人が英語科の授業に入るという流れが完成した。

2.3 留学生の人数

4人班のなかに留学生が1人入ると、40名のクラスサイズでは10名の留学生が必要となる。

2016年度の導入初期では、留学生の確保に苦労した時期もあり、1つの授業で6名ほどであったこともあったが、これでは、1グループあたり6～7人程度となり、定められた時間内で留学生と十分会話をすることができない。また、グループの端の方に声が届かなかったり、グループ内の生徒同士で話をしてしまったりするなど、あまりいい環境ではない。その一方で、14人程来たこともあった。多い分には英語の学習という面では問題ないのかもしれないが、予算を圧迫してしまう。(留学生には謝礼・給与が支払われる。)これをうけて2017年度では各時間8名から10名のあいだで調整するよう心がけている。

2.4 留学生の国籍

留学生の国籍は多岐にわたる。アメリカ、インドネシア、ウズベキスタン、オーストラリア、韓国、スウェーデン、台湾、中国、ドイツ、ポーランド、ロシアなどである。ヨーロッパやアジア、アメリカ、オーストラリアなど様々な地域から来ている。また日本では接する機会の少ないイスラム教徒の留学生もおり、生徒にとっても貴重な出会いとなるであろう。

ここで重要なのは、英語の授業に来る留学生は全員がネイティブスピーカーでなく、むしろネイティブでない留学生の方が多いということである。

「ネイティブスピーカー」という言葉は巷にあふれているが、ややもすると、白人の外国人であるという誤った認識が多くもたれていると思われる。「英語のネイティブスピーカー」というのは、第一言語が英語である人の

ことである。アメリカ人であっても第一言語が英語でなくスペイン語であることもある。

第一言語が英語でない外国人とも英語を通じてコミュニケーションを取る体験をすることが重要であり、この留学生授業はその機会を提供する貴重な学びの場なのである。

また、この授業が始まる前、アジアからも留学生が来ることについて、生徒から否定的な声(欧米の「正しい」英語に接したいということ)を耳にしたこともあったが、授業が終わればアジアの留学生が流暢な英語で話していたことに刺激を受け、英語の学習を頑張ろうという前向きな気持ちになり、また欧米系でないと嫌だという、偏狭な意識もなくなったようである。

さらに、ネイティブの英語ではないような表現や発音に対しても否定的な感想は見受けられず、外国語で意思疎通を取ることの楽しさや相手の文化や気持ちを汲み取ること慣れていったようである。これこそ、国際的な視野を持った人間の育成であろう。

このように、ネイティブスピーカーでなく、むしろ世界中の国や地域から留学生が教室に訪れることのメリットも計り知れないのである。

2.5 授業の基本展開

8～10名の留学生が教員とともに教室に入り、まずは簡単な自己紹介をする。その後、留学生の人数に応じて生徒のグループを作り、机を寄せ合う。例えば留学生が8名いたら8つのグループを作る。その後、留学生は集合場所(会議室)から持参するようお願した椅子を持って、各グループにつく。教室は写真1のような様子になる。



写真1 留学生授業の教室の様子

留学生の参加人数は回によって異なりまた当日体調不良等で休むこともある。そのためグルーピングを迅速に

するためにスクリーンに図1のような座席表を映し出す。これはエクセルで作成した座席表であるが、5班から12班まで対応している。当日、例えば9つの班を瞬間的に作るのは容易ではないだろう。グルーピングのための時間は極力短くしたい。

図1 グルーピングの表示

グループができ留学生が入ったら、簡単な自己紹介をする。このとき、裏紙等を用いてネームカードを作る。留学生が生徒に声をかけやすくするためである。

その後、教員が当日のテーマを説明する。(事前課題がある回とない回がある。) それに基づき、グループの中で自分に関する話をしたりディスカッションをしたりする。

一定時間が経過したら、プレゼンテーションを行う。各班の代表者が教室の前に出るか、その場に立って発表をする。留学生と一緒に発表をすることもある。

なお、発表者の決定は、各グループに任せると帰国子女など英語が上手な人が選ばれ、そうでない生徒は発表の機会が少なくなる傾向にあるので、教員の方で無作為に指名した方がいいだろう。先ほどの図1で示したエクセルファイルは発表者の決定にも使える。発表者を示すシートを選択すると、図2のように表示される。

図2 発表者の表示

図2は、図1と同じ座席表だが、発表者がスクリーン上で赤く表示されている。このように示されると、教室では歓声が湧き、発表者に該当した生徒は、普段は嫌がって敬遠する生徒であってもあきらめて発表する準備を始めるものである。

発表は、留学生の数、すなわちグループの数が多いと全てのグループの発表が行われないこともある。各グループでの話し合いとプレゼンテーションの時間のバランスを、授業の雰囲気をみて教員が判断することになる。

なお、プレゼンテーションの意義について、会話に熱心な生徒は、ずっと話したいのでプレゼンテーションはいらないと考える生徒もいるが、他の班ではどういう意見が出たのかなど、多様な観点を共有するため、発表の時間を設けている。また、活動のゴールをプレゼンテーションとして設定することで、グループで話した内容を振り返り、まとめるという作業も有意義であろう。

最後に、この授業での自分の活動を振り返り、ルーブリックによる自己評価を行う。また、留学生授業についてのアンケートを行うこともある。

授業の基本的な流れはこのようになっており、毎回大きく変化することはないので、生徒・留学生・教員にとってスムーズに授業を進めることができると思われる。

2.6 留学生の役割

留学生は、グループの中に入り、会話をリードする役割を持つ。毎回、留学生が集合したときに事前ミーティングを行うが、その際次の3点を特にお願いしている。

- ・日本語が話せないふりをする。
- ・黙っている生徒に声かけをする。
- ・会話を楽しく持続させる。

1点目はとても重要なのだが、留学生が日本語を話してしまうとこの授業の前提である、英語を使わざるを得ない状況が崩れてしまう。

2点目は、英語に苦手意識を持ち、あるいは、初対面の人と接することが苦手で引っ込み思案になっている生徒には、”What do you think?”等と言って声かけをしてもらうことをお願いしている。留学生が話をしやすい生徒とだけ盛り上がっていても仕方ない。

3点目は、留学生の方から積極的に楽しい雰囲気を創出してほしいということである。かつて、「終わったけど次は何をすればいいのか」と質問してきた留学生がいた。そのような態度ではなく、時間が続く限り会話を拡

げられることを、留学生に期待している。

このプロジェクトに大変興味を持ち、何回も参加してくれる留学生もいるが、彼・彼女らは回数を重ねるにつれ、TA（ティーチングアシスタント）としての技量が伸びていき、とても頼れる存在となっている。

2.7 教員の役割

教員の仕事として、まず留学生の確保から始まる。各時間に留学生が何人来られるのか、大学と連絡を取りながら、各時間の枠に当てはめていく。例えば、留学生授業が8時半から始まる1時間目と15時10分に始まる7時間目に設定してしまうと、間が空きすぎて都合が悪い。できるだけ時間をつめて設定する工夫が必要で、時間割調整などが必須である。

当日、留学生を迎えるのも教員の仕事である。集まったら前節であげたような留意事項を伝える。時間になったら椅子をもって授業教室まで案内する。通常、授業を担当する教員と、案内をする教員は別である。

授業における教員の役割であるが、本授業は共通の指導案のもとに「英語表現Ⅱ」を担当する教員が授業を行っている。共通の指導案でなければ、留学生はクラスごとにやるのが異なってしまう、混乱してしまう。授業担当教員は「2.5 授業の基本展開」で述べたような流れを時間を測りながら展開する。ここで重要なのは、各グループのコミュニケーションの展開や活発さ等を見て、活動の切り替えのタイミング（例えばプレゼンテーションを始めるタイミング）の指示を出すことである。そのため、生徒の活動中は各グループの様子をよく観察する必要がある。全体を観察し、活動のバランスをとる判断を下すことが、教員の役割である。

なお、この授業では教員の指示も全て英語で行っているが、これは生徒も留学生も英語を使う以上、自然な流れである。ここで日本語を使ってしまうと英語を使う環境を自ら崩してしまうことになる。

3. これまでの授業実践

3.1 授業で扱う題材

本章では、これまでの授業で扱った題材について述べる。表1は、2016年度と2017年度の内容の一覧である。本稿執筆時点で、2017年度第4・5回はまだ実施していない。

2016年度		
第1回	6月	名前の由来
第2回	11月	公共の場のマナー
第3回	1月	互いの国について知る
第4回	2月	世界平和の為に何が出来るか
2017年度		
第1回	5月	名前の由来
第2回	6月	日本の不思議な習慣
第3回	11月	互いの国について知る
第4回	1月	時事問題（予定）
第5回	2月	世界平和の為に何が出来るか（予定）

表1 留学生授業の内容

ここにあげたものいくつかの類型に分ける。情報交換型、時事問題型、事前準備型と分類してみたい。この分類は便宜的なものであり、内容による分類と形式による分類が混合しているが、留学生授業の在り方を模索しているなかで徐々に形成されている授業の形を表している。

3.2 情報交換型

トピックが与えられて、その場で自分の情報を提示したり、留学生から情報をきいたりするタイプの活動である。表1では2016年度および2017年度の第1回に行った「名前の由来」と第3回の「互いの国について知る」がこれに該当する。事前準備は必要なく、自分の名前の由来を述べたり、日本について質問されたら持っている知識で答えればよい。名前の付け方を含む、相手の国や文化についての質問も行う。

「名前の由来」では、例えば本稿執筆者の一人である私の名前である「怜太郎」について、「怜」は賢いことを、「太郎」は長男を表す。このように、名前に意味をつけて命名することは日本の文化では普通のことであるが、世界の各地域ではさまざまな命名の文化がある。この活動は、やるのが明確で取り組みやすく、また文化の違いも知ることができるため、初回として適した話題

である。

「互いの国について知る」活動では、日本人は留学生の国について、地理的文化的なことを自由に質問する。各グループにタブレットを貸与するので、留学生は国の位置を地図で示したり、生活の様子特徴的な食べ物や衣装などを写真で見せたりすることが可能である。一方で、留学生は日本で生活していて不思議に思っていること等を質問する。「なぜ、日本人は倒れるほど働くのか」というよくある質問から「なぜ、穴が空いている硬貨があるのか」、「なぜ、日本の洗濯機はお湯を用いずに水で洗濯するのか」など、日本で生活していて普段考えないような質問が出る。この活動を通して、知っているようで知らなかった日本の一面に気づけば、より国際感覚の獲得に近づいていくのであろう。

3.3 時事問題型

そのとき話題になっている話題について、国外の人からどう見るのか、話し合うタイプの活動である。表1では2016年度の第2回「公共の場のマナー」である。当時、鉄道会社が車内で化粧をするのは「みっともない」という広告を出していた。この広告については日本国内でも賛否両論となっている。（“東急電鉄「車内で化粧はみっともない」啓発広告に賛否両論の嵐”。J-cast ニュース、2016 <https://www.j-cast.com/2016/10/26281774.html?p=all>、(参照 2017-11-30)）この広告について、特に欧米系の留学生からは、車内での乗客の行動について、鉄道会社からみっともない (ugly) と言われるゆわれはない、という意見が多かった。これは、国内ではあまり聞かれない意見だと思うが、国内のことでも国外から見るとどのように見られるのかを知る機会となった。

この原稿を執筆している時点で、乳児を抱いて議会に参加しようとしたら拒まれた、というニュースが話題になっている。このような出来事は外国人はどう思うのか、外国ではどう思うのかなど、議論がしやすいのではないかと思う。このようにさまざまな観点からの意見が出る話題を選定して授業を行いたい。

3.4 事前準備型

事前にライティング課題やリーディング課題を与え、内容について事前によく考えたり、スムーズに内容をまとめられるようにしたりすることを求めるタイプの授業である。

2016年度第4回では「世界平和の為に何ができるか」というテーマの作文課題（100～200語）に事前に取り

組んだ。授業では、各生徒のアイデアを留学生ならびにグループの生徒に対して説明する。その後グループで話し合い、一つのキーフレーズ（例：Respect others）を作り、グループの意見をまとめる。留学生の視点も入り活発な議論になった。

2017年度第2回では、本校公開研究会で行った授業であるが、リーディング課題として事前に記事を読んでくることを求めた。授業当日ではリテリング活動を行い、それについて留学生と質疑応答を交わした。リテリングとは白畑ら（2009：297）によると、「リーディングを通して理解した教科書本文の内容を、口頭で再生する活動」である。暗唱とは異なる。題材の内容は日本における不思議な習慣（旅行に出かけたらおみやげを職場に配る、手刀をきって「すみません」と言いながら人の前を通る、映画のエンドロールを最後まで見るなど）である。日本人から見たら常識的なことでも外国人からみたら不思議に見えることを知り、多角的な視野でものごとを見る経験をするを意図した。

3.5 授業で扱う内容についての課題

これまで、授業で扱う内容について、3つの型に分類してその特徴を述べた。留学生授業で扱う内容は、授業の活動内容に密接に関係しているので、慎重に選ばなくてはならない。

情報交換型のような話題は、気軽に話すことができるが、全ての回がこのような単純なものだと、知的好奇心を満たすことができず、やがて飽きてしまうだろう。

一方、グローバル世界での複雑な現代社会の内容を扱う際は、事前学習型のようにあらかじめ調べてくることになる。本校と同様に留学生を招き授業をしている金沢大学附属高等学校において、真木（2016：66）は「用意していた質問を留学生に答えてもらうことが果たして『口頭での英語の運用能力の高まり』を意味しているのか、という問題がある。」と述べている。レベルの高いスピーキングの授業とは、扱う内容が社会的政治的、あるいは科学技術について等、難解な内容を扱うものではないだろう。そのような話題について英語で話している授業は一見華やかに見える。しかし、簡単な内容について自分の意見を即時に言える能力なくして、準備してきた高度な内容を再生するだけでは、はたして英語運用能力を育てていると言えるのか疑問である。

まずは、自分の思ったことや、質問されたことを平易な語意を用いて素早い反応で伝える練習から始めることが必要であろう。

4. 生徒の反応

4.1 アンケート調査項目

2016年度第3回(11月)で授業を受けた生徒313人を対象にアンケートを取った。本章ではこのアンケートを通して、生徒の反応について考察したい。質問項目は以下の通りである。

- ①「外国語を話すこと」に対してあなたの意欲はどの程度ありますか？
- ②母国語以外に外国語を身につけることは、これから自身にとって必要になると感じますか？
- ③今年度3回実施した留学生との授業を通じて、「英語を話すこと」に対する自己評価はどうか？
- ④実際に正規授業のなかで、外国人のスタッフと外国語で話すことは必要だと思えますか？

4.2 アンケートの回答および分析

先にあげた質問項目について、それぞれの回答を見て、その背景を考えたい。

- ①「外国語を話すこと」に対してあなたの意欲はどの程度ありますか？
 - 積極的に話したい…………… 29%
 - できれば話したい…………… 27%
 - 苦手意識はあるが話したい…………… 36%
 - できれば話したくない…………… 6%
 - 話したくない…………… 2%

「話したい」という文言を含む最初の3項目をあわせると、92%となる。ほとんどの生徒が外国語でコミュニケーションを取りたいと思っていることがわかる。「話したくない」という回答には苦手だから話したくないのか、もともとゼノフォビア(外国人嫌い)的傾向を持っているかは、今の時点では見えていない。

- ②母国語以外に外国語を身につけることは、これから自身にとって必要になると感じますか？
 - 必要なので是非身につけたい…………… 53%
 - 必要なのでできれば身につけたい…………… 35%
 - 必要だがどうするかはわからない…………… 9%
 - あまり必要性を感じない…………… 1%
 - 必要性を感じない…………… 2%

最初の3項目は必要性を感じている回答になるが、こ

れらを合わせると97%となる。①では「話したい」という種類の合計は92%となり、「話したい」という気持ちよりも必要性を感じている人の方が5%多いことになる。この差は、たとえ話したくなくても必要だ、と考えている生徒により表れているのかもしれない。いずれにしても、ほとんどの生徒が外国語を身につける必要性を感じていることがわかる。

- ③今年度3回実施した留学生との授業を通じて、「英語を話すこと」に対する自己評価はどうか？
 - よく話せた…………… 6%
 - 思ったよりも話すことができた…………… 27%
 - どちらでもない…………… 30%
 - 思ったより話せなかった…………… 30%
 - まったく話せなかった…………… 7%

この質問について「よく話せた」・「思ったよりも話すことができた」と、「どちらでもない」と、「思ったより話せなかった」・「まったく話せなかった」とがほぼ三分されることになったのは興味深い。「話せなかった」という回答は必ずしも残念な結果としてとらえられるものではない。英語に自信があつてこの授業に望んだところ、思ったほど言葉がでなくてもどかしい思いをしたということがありえる。そのような体験がきっかけで英語の勉強により意欲を出すことも十分に考えられる。同様に、英語が苦手な生徒が少し声を出してみたら相手に通じて、喜んで「よく話せた」と回答することもありえる。これはこれで英語の学習にプラスになることだろう。もちろん、高いパフォーマンスを示す生徒がよく話せたと実感することも、話すことに苦手意識を持つ生徒がやっぱり話せなかったと感じることもあろう。自己評価と英語の成績の関係は第5章で述べるが、「話せた」「話せなかった」のいずれの感覚も英語の学習に前向きにつながっていく学習環境を作りたい。

- ④実際に正規授業のなかで、外国人のスタッフと外国語で話すことは必要だと思えますか？
 - とても必要性を感じる…………… 36%
 - どちらかといえば必要である…………… 46%
 - どちらでもない…………… 13%
 - あまり必要性を感じない…………… 4%
 - 必要性を感じない…………… 1%

8割を越える生徒が授業の中に外国人がいる必要性を

感じている。ニーズとしては理解しやすい。4技能型の大学入試が模索されている中、話すこと、聞くことに対する高校生のニーズはますます高まるだろう。もちろん、ただいけばいいというものでもない、肝心なのはどのような力を伸ばしたくて、そのために「外国人のスタッフ」にどのように活躍してもらうかを検討することである。無計画に外国人を配置したところで有効に活用できなければ「いる意味がない」などと言われてしまう。現在、留学生授業は高校2年生に年5回程度配当しているが、対象や頻度が代われば授業のあり方もそれに伴って変わってくるのである。これからも生徒のニーズを理解した上で、彼らに最適な学習環境を提供し、指導を展開したい。

5. ルーブリックによる自己評価

5.1 自己評価の概要

英語科では読む・聞く・話す・書くの4技能の育成が求められているが、これらのうち話すことの評価というのは極めて難しい。ペーパーテストと異なり、厳密な採点は不可能といえる。例えば、被評価者がピアノの演奏をし、1人の評価者がそのパフォーマンスを1点刻みの100点満点で評価するのは不可能であろう。40人のクラスサイズで各グループで留学生を交えて議論しているのを観察し、1人1人のスピーキング能力を測ることは、まったく現実的ではない。現実的に可能なのは一人一人の事後の自己評価であろう。

留学生授業では、毎回各授業の最後に表2のルーブリックを用いて自己評価を行っている。

本章では、2017年第2回と第3回のデータを用いながら、生徒がどのように自己評価を行ったのか観察した

い。第2回は事前準備型、第3回は情報交換型の授業である。詳細については第3章を参照されたい。

5.2 自己評価の分析

2017年度2学年に在籍している人数は337名である。そのうち、第2回の授業に出席しルーブリックを提出した生徒は301名、第3回は302名であった。今回は自己評価の変遷を追跡するため、両方の授業に参加し、かつ、全ての項目にもれなく回答した生徒以外のデータは捨象する。その結果、今回の自己評価の分析対象となる生徒は273名となった。

自己評価の全対象生徒の平均を求めると表3のようになる。

	コミュニケーションの展開	話すこと	聞くこと
第2回	2.46	2.54	2.63
第3回	2.49	2.53	2.79

表3 自己評価の平均値

まず、ルーブリックにおける3つの項目について、自己評価の高さの順番は第2回・第3回共通して「コミュニケーションの展開」、「話すこと」、「聞くこと」の順番で高くなっている。「聞くこと」がもっともできたと感じているということである。「話すこと」と「聞くこと」は4技能のうちの2つである。受信より発信の方が確かに難しいのかもしれないが、それが数値として表れたのは興味深いことである。言葉およびジェスチャー等を用

	キャップストーン	マイルストーン		ベンチマーク	自己評価
	4	3	2	1	
コミュニケーションの展開	会話が夢中になることができる。	会話に興味をもち積極的に参加できる。	グループの会話が途切れないよう、言葉を発することができる。	グループの会話が途切れることがあるが、意思表示はする。	
話すこと	自分の考えを伝えたり、話題を発展させたりすることができる。	自分の考えをしっかりと伝えることができる。	自分の考えを断片的に伝えることができる。	尋ねられた際、返事や応答を行う。	
聞くこと	話の展開を予想しながら聞くことができる。	相手の考えをしっかりと理解することができる。	相手の考えを断片的に理解することができる。	何について話しているのかを理解する。	

表2 留学生授業で用いているルーブリック

いてコミュニケーションを展開することにはさらに自己評価は低くなることが示された。

それぞれの数値の第2回から第3回への数値の変化に注目してみると、「コミュニケーションの展開」や「話すこと」はわずかな変化が見られるが、「聞くこと」は0.1ポイント以上の上昇が見られ、全体としてみると聞くことの自己評価を高くつけた生徒が多いように見える。では、多くの生徒が「コミュニケーションの展開」・「話すこと」についてはほぼ同じ自己評価を、「聞くこと」については第3回の方がより高い自己評価をしたのだろうか。表4を参照されたい。

	コミュニケーションの展開	話すこと	聞くこと
上昇	83	69	78
変化なし	115	132	157
下降	75	72	38

表4 自己評価の値の変更に関する人数

表4は第2回から第3回にかけて、自己評価の数値がどのように変化したのかを示したものである。例えば「話すこと」では全体平均ではほとんど変化がないように見えるが、69名の生徒が第2回より第3回の方がよりできたと自己評価する一方、72名の生徒がよりできなかったと自己評価している。「コミュニケーションの展開」についても「話すこと」同様、できるようになったと答えた生徒ができなくなったと答えた生徒をやや上回った。その一方で、「聞くこと」に関しては自己評価が上がった生徒が下がった生徒の2倍おり、全体としての平均の上昇につながっている。

私は、回を追うごとに自己評価の各項目は上がっていくものと予想していたが、「話すこと」については自己評価はむしろ下がっていた。これは、第2回では事前に読んだ記事についてリテリングを行う活動を含んでいたため、あらかじめ頭の中にある情報を再現するスピーキング活動であったからと思われる。第3回は事前準備を必要としない活動であったので、即興性が求められる困難を覚えた生徒が少なからずいたのかもしれない。

「話すこと」と言ってもその中身は一様でなく、あらかじめ準備してきたことを口に出すことと、その場で自分の意見や感想を述べることは異なったスキルと言える。この分析から、後者のスキルを向上させる指導の展開が

必要であることが求められていると言えるかもしれない。

今回は、第2回と第3回のみ分析であったが、今後もデータが蓄積し、分析する手法が確立されれば、生徒の変容をより詳細かつ的確に捉え、より適切な指導計画が立てられるようになるだろう。

6. 会話の自己評価と筆記試験

6.1 学校における会話と筆記試験の扱い

日本の中学・高校における英語について、会話と筆記試験は別物であるかのように見られている傾向があると思える。普段の授業で会話をする相手がそもそもいないことと、入試において筆記試験が大勢を占めることで、学校の授業、とりわけ高校では、特定の時期（1年次に週1時間等）を除いて会話は扱われていないのが現状だろう。そこで本章では前章で扱ったループリックの自己評価とペーパーテストの関係について観察する。

6.2 会話の自己評価と筆記試験の相関関係

では、実際に生徒の自己評価と試験の成績の相関関係を探りたい。生徒の自己評価は、前章であげたループリックについて第2回と第3回それぞれの「コミュニケーションの展開」「話すこと」「聞くこと」の3項目の総計を求めた。最低は自己評価をすべて1とした場合6となり、最高はすべて4とした場合、24となる。試験の成績は、2017年に校内で実施した実力テストを用いる。100点満点のテストである。対象は、2回の留学生授業に参加してループリックを提出し、かつ、実力テストを受けた生徒271名である。エクセルのCORREL関数を用いてグラフを描出した（表5）。

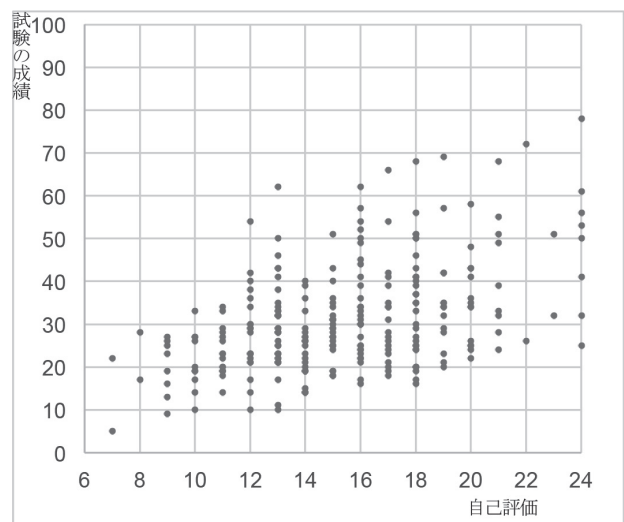


表5 自己評価（横軸）と試験の成績（縦軸）

ピアソンの相関係数は $r=0.471$ であり、留学生授業の自己評価と筆記試験の点数のあいだに、中程度の相関関係があることが示された。

6.3 相関関係の持つ意味合い

会話の自己評価と筆記試験の成績の間に相関関係が見られたことは何を意味するのだろうか。

定期試験や実力試験等で高得点を取る生徒は、リーディングを中心とした能力が高く、また英語に対する自信もあるだろう。語彙や文法の知識（運用能力）を活用しながら会話にのぞめば不自由なくコミュニケーションを取ることができ、その結果、留学生授業でのパフォーマンスについての自己評価も高くなることが伺える。（もちろん、英語に自信があるからこそ会話で思ったように話せず、低い自己評価をつける可能性があることは、第4章で触れた通りである。）

さて、その逆について考えてみたい。すなわち、会話に不自由しないほどの高い英語運用能力を持っているからこそ（故に自己評価も高い）、筆記試験でも高い成績を収めるということである。もしこの関係が正しいのなら、筆記試験対策として、会話やスピーキング活動を積極的にい行い英語の運用能力を高めるというアプローチもありえるだろう。これは、日本の学校の「常識」では突飛なことを言っていると思われるかもしれないが、英語を実際に活用する指導が、英文読解や作文能力の向上に貢献しないとどうして言えるのだろうか。

4技能型の大学入試が提唱されている中、日本の高校において、会話の指導はいずれにしても求められるようになる。いわゆる「英語力」とは4技能がそれぞれ独立したものでなく、お互いに関連している複合的な能力であるので、本稿であげている留学生授業のような会話を促す授業は、大学入試を含めた各種英語技能試験にも、実際のコミュニケーションにも、有効であるといえるだろう。

7. 今後の課題

本稿では、2016年度より始まった留学生授業について、その狙いや授業の内容、生徒の反応や自己評価のデータに基づく分析を扱った。

試行錯誤をしながら、より良い授業展開を模索している。また、生徒の反応から、このような授業形式は生徒の需要の高いものであることが伺え、自己評価と筆記試験に中程度の相関が見られることが今回の調査で見出された。

今後も生徒の変容を捉えるため、アンケートの項目を精査したり、より多くのデータを収集分析を継続したりしたいと考えている。

この留学生授業は、英語が苦手な生徒も含め、好意的に思っている生徒が多い。生徒の中には「外国人は怖くないことが分かった」と言っている者もいた。また、このプログラムに多くの留学生がとても楽しんで参加し、リピーターも多いことはありがたいことである。

英語科の授業の目的としては、会話を促すことでスピーキング能力を始め、英語の技術を向上させることだが、外国人と交わることで国際的な感覚を身につけることができれば、本校のかかげる世界性の豊かな人間の育成に結びつくことだろう。

引用文献

- 白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則．(2009)．『改訂版英語教育用語辞典』東京：大修館書店
真木啓生（2016）「Global Discussion 国内留学を目指して．」（金沢大学附属高等学校『高校教育研究』（67）：63-69,2016年）